

合同会社 NOMIEL/NEEDMORE グループ

代表 三浦 侑真

多様な生き方を実現できる教育

人の力を重視したICT教育を展開



神戸市出身。高校時代からHP制作や動画編集、アフィリエイトなどのスマートビジネスをスタート。高校でニュージーランドへの短期留学を経験したのち、韓国の大大学へ進学。世界の経営者たちと交流を深める。帰国後、2021年に合同会社NOMIELを創業。NEEDMOREグループを設立し、教育事業に注力する。

— 教育事業に注力されているそうですね。

個別指導塾「ニードモアアカデミー」では、完全地域密着型で子どもたちのやる気を引き出す指導を行っています。学年や教科によって日程が縛られない、個々のスケジュールに合わせた完全個別型カリキュラムを組んでいます。さらに学習塾やスクール運営に特化したアプリケーション、ソフトウェアの設計と開発を行う「NEEDMORE【ECU】事業も展開し、オーダーメードのICT教材を各教育機関に提供しています。

— 三浦代表はずっとICTの仕事をされてきたとか。

Webサイトやデジタルコンテンツ制作を手掛けた「NOMIEL」という会社を興して運営していました。元々高校生の時からホームページ制作や動画編集を始め、ビジネスをスタートしていきました。高校時代に行つたニュージーランド短期留学や韓国への大学進学といった経験の中で世界の経営者たちと交流する機会が多くて、彼らのように自身で事業を興したいと思うようになりました。

— 教育事業に携わろうと思われたきっかけは何だったのでしょうか。

学生時代に自分の周りで就職をしていった先輩や大人を見ていると、皆と同じ流れになつてなんとなく自分が行ける会社に就職し、あまり好きではない仕事をしている人が多いと感じていました。私は運良く自分の力でお金を稼ぐというプロセスを高校時代に踏んでいたということもあり、自分の夢を持ち、サラリーマンでもサラリーマン以外の道でも選べるような人が増えてほしいと思つたのです。そこで一念発起し、子どもの教育事業に携わるようになりました。

— 教育事業で大切にされていることは何でしょうか。

ICT教育が急速に進んでいるこの時代だからこそ、人と人の関わりを大切にしています。今はオンライン学習塾や生徒が教室に来てタブレットやPCで授業を受けるという自立型の教

室が増えてきていますが、私たちの塾ではICT教材を活用しながらも、人が実際に教育を行うことを大切にしています。ICT教材は勉強の効率化や知識のインプットの部分に大きな強みがありますが、そこに頼り切ってしまうとどうしても生徒自身のやる気が引き出しきれません。なので、モチベーションは私たちが直接対面で上げていくようにしています。生徒一人ひとりに合わせて担当講師が教える形で進めながらも、授業の内容や進捗を先生たちがクラウド共有し、担当講師が抱え込み過ぎないように私も適切なアドバイスを行いシステムで生徒を支援する仕組みを取り入れています。

— 生徒の可能性に蓋をしないために、心掛けていることはなんでしょうか。

生徒が間違った回答をしたときに、正すだけではなく、なぜそぞういう考え方にならなかったのかをまた認めあげて、否定せずに進めていくことを大切にしています。答えがある問題であれば、教育者はどうしても間違ついたら答えを正すという一つの方向に行きがちです。しかし、生徒からすればそれが自分の考え方か否定されたという思いになつてしまふこともあります。そんな思いをさせないように、まず認めて、時には褒めながら指導をしています。それは小さなことの積み重ねではありますか、徐々に生徒自身が変わつてしましますし、子どもの可能性に蓋をしないその過程が、彼ら自身が将来の選択をするときにも生きてくると考えています。

— 最後に、読者の方へのメッセージをお願いします。

春になったタイミングで、今の塾で成績が上がりながら、子ども自身が行きたがらなかつたりなどでこちらに転塾を検討されるご家庭が増えています。そういう中、家庭の方に来ていただければ、私たちの塾は子どもたちに合わせて指導していくことが得意ですので、可能性をもっと広げることができます。来ていただけたら、一人ひとりのやる気を引き出し、ここで頑張りたいと思っていただけの自信があります。子どもたちが社会へと歩んでゆく架け橋となり、知識だけでなく、豊かな人間性や自信を持つ羽ばたけるよう、最高のサポートを提供します。

子どもの可能性を広げ、選択肢を増やす教育を。

NEEDMOREグループでは学習塾運営を支援するシステム開発からICT技術を手段として活用し、人の力を最大限に重視した学習塾運営を手掛けています。ITの現場に長年関わってきたからこそ、「人を教育するのはどこまでいっても人であり、人を本当の意味で教育できるのは人しかいない」と考えています。より高度な人間とテクノロジーの融合を目指しながら子どもの限りない向上心を引き出し、自らの可能性に決して蓋をしない未来のリーダーを育てます。